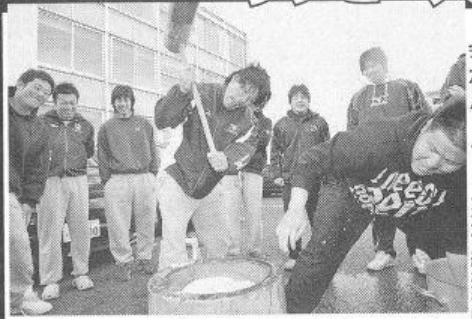
ラグビー大学選手権1月2日準決勝

打倒！帝京大へ〝脳内革命〟
明大「スラムダンク」で勝つ

ラグビーの大学選手権で2大会ぶりに準決勝に進出した明大が29日、〝脳内革命〟に取り組んだ。吉田義人監督（40）が、『スラムダンク勝利学』の著者でスポーツドクターの辻秀一氏（48）を招き、約2時間の講義を受講。準決勝の相手・帝京大には11月の対戦で0―56と大敗。頭の中からマイナス要素を排除し、雪辱を期す。



年末恒例のもちつきを行う明大ラグビー部。つきあがったもちは周辺住民にも配られた　（撮影・中川春佳）

2時間みっちり メンタル面強化

頭の中から強くなる。明大フィフティーンは世田谷区八幡山グラウンドで約2時間の練習後、スポーツドクターの辻氏の講義が約2時間。大学選手権開幕直前に続き今回が2度目だが、選手は脳みそにも汗をかいた。

著者の辻氏招き講義…0―56大敗のリベンジ

「辻先生は、私が普段思っていることを体系化されている。違う人が話せば、選手にもっと吸収してもらえると思った」

吉田監督が部内に立ち上げ、部の運営面を担う「運営統括部」がメンタル面の話ができる候補者をリストアップ。同監督が熟考し、依頼した。

頭の中からマイナス要素は一切排除。過去を見ても後悔しかない。未来を見ても先のことはわからない。だから今を精いっぱい生きることが大切、と辻氏は訴えた。

「考え方が間違っていなかった、と実感できた」とFL西原忠佑主将（4年）も、自らの考え方が整理され、自信を深めた様子。準決勝の相手・帝京大には対抗戦で大敗。しかし、そのトラウマはこの日の〝脳内革命〟で一掃されそうだ。

（林健太郎）

これで粘り強く!? 年末恒例もちつき

◆…明大は午前中にもちつきを行った。故北島忠治監督時代から続く年末の恒例行事。お世話になった周辺住民への感謝の気持ちを示すため、昨年約45キロだったもち米を60キロに増量。100人以上の部員がもち米が飛び散るほど力強くついて、近隣に配って回った。「縁起物ですし、これでいい年が迎えられます」と吉田監督もニッコリ。（八幡山）